

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 中村 隆之	留学機関名 アンティル＝ギアナ大学 フランス語・クレオール語圏空間研究グループ
留学先国名 フランス	留学期間 西暦 2009年9月～2010年9月
研究テーマ  仏語圏カリブ文学に見る集団的アイデンティティへの想像力の研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>【研究の背景・要請】カリブ地域は、奴隷貿易と奴隷制度による植民地支配の歴史を通して、諸文化の不可避的な交差や混交（アフリカ文化、ヨーロッパ文化、先住民文化等）を経験してきた場所である。なかでも仏語圏カリブ地域（現フランス海外県マルチニク、グアドループ）は、20世紀中盤以降、旧植民地の多くが「独立」を達成する中で、旧宗主国の枠内に留まった数少ない地域である。従って、同地域住民はフランス国籍を有するが、アフリカを主要な起源とする混淆的文化に属している。このため、同地域では政治的アイデンティティと文化的アイデンティティの分裂と葛藤が重要な文学的主題を形成してきた。とりわけ文学は、集団的な文化的アイデンティティを形成するための想像力として重要な役割を果たしてきた。</p> <p>【研究の目的と対象】本研究の目的は、仏語圏カリブ地域の文学の展開を集団的アイデンティティ探求の軌跡として捉えたところから、同地域を代表する三人の黒人作家の比較検討を通じて、仏語圏カリブ文学に見る集団的アイデンティティへの想像力を多角的に考察することにある。本研究ではこのアイデンティティへの想像力を考える際に重要なエメ・セゼール（1913-2008）、フランツ・ファノン（1925-1961）、エドゥアール・グリッサン（1928-）の諸作品を対象とする。セゼールは黒人としての自覚の必要性を提唱した詩人、ファノン植民地闘争を通じた民族概念の創出を唱えた活動家、グリッサンはカリブのアイデンティティをアフリカ的要素とヨーロッパ的要素との総合として捉えようとした作家として位置づけられる。こうした展望のもとに各作家のアイデンティティ探求の在り様を彼らの時代との係わり方において明らかにしたい。</p> <p>【先行研究との関係】わが国の仏語圏カリブ文学研究は緒についたばかりであり、個別の作家研究を除けば、先行研究は存在しない。海外の研究ではアイデンティティ論の関係においてジョルジュ・ンガル、ジャン＝ポール・マドゥ、アルベール・メンミ等の個別研究が参照項となる。本研究はこれらを踏まえた総合的研究として位置づけられる。</p> <p>【研究の学術的・社会的意義】グローバル化が進行し人々の移動が常態となった現代世界において、文化的アイデンティティの探求はきわめて切実な問題となっている。具体的には、いわゆる移民系の人々のアイデンティティや国民国家内の少数民族のアイデンティティの問題等がそうである。本研究はこうした今日的課題に応えるものであり、なおかつ未来のヴィジョンを提示するものだと考える。というのは、上述のように、同地域の文化はアフリカを主たる起源に持つとはいえ、一つの起源に回収しえない混淆性を特徴とする以上、同地域の文学の展開は、アイデンティティが〈関係性〉において成り立つという発想を示すものであるからである。また本研究は、フランス植民地研究のなかでは比較的手薄である文学研究を通して、植民地主義が民衆に与えた心的圧力や葛藤を文学的描写の中から析出することにより、植民地における文化的問題としてのアイデンティティ問題の根深さを提示するものである。さらにまた、本研究はアルジェリア革命や第三世界主義の文脈で語られることの多いファノンを仏語圏カリブ文学の文脈から捉えなおすことに学術的特徴があり、この意味で、三人の作家をアイデンティティの探求という観点から整合的に論じる本研究は、国際的なカリブ文学研究に資するものであると期待される。</p>	

# 成果報告書

記入日 2010年 4月 1日

氏名 中村 隆之	留学先国名 フランス マルティニック	所属機関 フランス社会科学高等研究院
研究テーマ：仏語圏カリブ文学に見る集団的アイデンティティへの想像力の研究		
留学期間：2009年4月～2010年3月		
<p>留学全般についての感想</p> <p>フランス海外県マルティニック島にあるアンティル=ギアナ大学言語文学芸術人文学学際研究所（GRILLASH）の客員研究員として、一年間同地に滞在した。到着翌日から、クレオール語学の泰斗であるジャン・ベルナベ所長に暖かく迎えられ、また、新聞記者の友人に最初の数ヶ月は住居を提供してもらい、留学は大変快調な滑り出しであった。人間関係は、人口40万人程度の小さな島であることから、日本に比べると濃密である。そのため、友人が一人できれば、その友人からまた多くの知り合いを紹介してもらおうことになる。筆者の場合、「日本人」という、島では大変珍しい存在であったこと、さらに島の文学を研究しているという珍しさが重なって、滞在中、多くの友人・知人に恵まれた。そして、島の人々の暮らしや多様な風景を見せようとする友人たちの車に乗って、筆者は何度となく島のなかを旅した。また、文化的な集いや催しが開かれるたびに誘いを受け、あちらこちらに出かけた。普段は話す機会がないような、島の政治家と話す機会をもったことも、そうした数ある出会いのうちの一つである。</p> <p>滞在期間中は、マルティニックが大きく揺れ動いた時期と重なった。留学直前の2月には一ヶ月以上におよぶ大規模なゼネストが島全土を覆った。筆者が到着した時には島は平穏さを取り戻していたが、マルティニック史上最大の社会運動といわれたこのゼネストについて、ゼネストの背景になった島の抱える諸問題について考えざるをえなかった。ゼネストの直接原因の一つといわれた島の物価高も実感することができ、マルティニックの社会問題や歴史について勉強する好機となった。</p> <p>この滞在中、多くの作家たちとも交流をもつことができた。とりわけ重要な収穫は、筆者が研究する作家、エドゥアール・グリッサンとの交流である。大変温かいもてなしを受け、彼が主催するカルベ賞の授賞式への招待、エドゥアール・グリッサン通りが開通した折の自宅でのパーティー、さらには昼食への招待などを受けた。写真は、グリッサン宅を訪問した折に撮影したものである。もう一つ、詩人モンショアシとの交流にも触れないわけにはいかない。モンショアシにも大変温かいもてなしを受けるとともに、彼が中心となり行っている「ラクゼミ」と呼ばれる文化運動に参加できたことは、何よりも得がたい体験であった。これらの経験は今後研究を進めるうえでの重要な礎となった。</p> <p>このように貴重な機会を与えてくださった松下国際財団に心より感謝の意を表したいと思います。</p>		

どうもありがとうございました。

## 研究成果

留学に先立ち、筆者は「仏語圏カリブ文学に見る集団的アイデンティティへの想像力」という研究課題を立てた。しかし、マルティニク島における研究滞在をとおし、この課題が途方もなく大きなものであることが徐々に感得されるようになった。そこで、筆者は研究課題を遂行するための基礎固めを行うことを第一に目標にした。

その基礎固めとは、何よりもまず、仏語圏カリブの戦後史をより深く知ることにあった。「われわれとは誰か」という、仏語圏カリブにおいて20世紀をとおして中心的な問いを形成してきた集団的アイデンティティの探求を考察するためには、政治を中心とした複雑な戦後史を把握する必要があると考え、この点を調査することにした。

この観点から、アンティル=ギアナ大学図書館、フォール=ド=フランス市のシェルシェール図書館、またアレクサンドル書店等で、戦後史にかかわる資料を収集した。収集方法としては、購入できるものなるべく購入し、すでに絶版のものにかんしては本を借り出し、必要箇所を電子化して保存することにした。資料読解の結果、エメ・セゼール、フランツ・ファノン、エドゥアール・グリッサンを中心にした作家たちの政治にたいする複雑な位置取りについて、一定の理解をえるとともに、仏語圏カリブの錯綜した政治力学に規定された現在のマルティニクやグアドループの政治情勢もある程度分析できるようになり、修正後の当初の目標は一応達成されたといえる。

留学中、筆者は熊本大学で行われた日本フランス語フランス文学会秋季大会のワークショップ「クレオール再考」の報告者として招待され（11月7日・8日）、同テーマに基づく報告を行った（司会：砂野幸稔氏、報告者：塚本昌則氏、管啓次郎氏、恒川邦夫氏、筆者）。また、この機会に同学会で「エドゥアール・グリッサン『レザルド川』における風景の詩学」と題した発表を行った。この発表は、研究課題の一環として、グリッサン小説における風景というテーマを考究したものである。なお現在この発表に基づいたフランス語論文を同学会誌に投稿中である。

最後に、滞在中に取り組んだ仕事にかんし、刊行の予定のあるものを挙げておきたい。

①« Poétique du paysage dans La Lézarde d'Edouard Glissant » (論文)

(『フランス語フランス文学研究』に投稿中)

②エドゥアール・グリッサン、パトリック・シャモワゾーほか「高度必需品宣言」(翻訳)

③「フランス海外県ゼネストの史的背景と「高度必需」の思想」(論文)

(以上の二点は岩波書店の月刊誌『思想』に掲載予定)

④エドゥアール・グリッサン『フォークナー、ミシシッピ』(翻訳)

(インスクリプトから近刊予定)



作家エドゥアール・グリッサンの自宅からの眺め。マルティニック南部の町ディアマンに位置する。



詩人モンショアシの自宅にて。右はモンショアシ、左は筆者。



地元のテレビ局のインタビューに応じる。サン=タンヌのトマソン闘鶏場で行われた「ラクゼミ」にて。